日本バハイ共同体発展の要因に関する一考察：21 世紀への提案
A Study on the Factors Influencing the Growth of the Japanese Baha'i Community: Suggestions for the 21st Century:

尊田　望 [1]
Nozomu Sonda

緒言

最近の日本の宗教事情

1995 年春に、某宗教団体による地下鉄サリン事件が起き、同団体による一連の殺人・誘拐などの事件が発覚した。この事件は一方では，現代日本人の宗教嫌いにさらに拍車をかけたと思われる。戦後、宗教的要素は教育や社会的状況からは排他され、「宗教に属している」というだけで「白い目で見られる」という風潮が広まった。また、宗教は迷信的・狂信的・頑迷的なもので、科学技術が発達した現代人には有害なもの、少なくとも無関連なものという見方が強い。

しかしその半面、前述の事件が起きた同じ年、日本の社会全体が、日本史上初めてともいうべきスケールで宗教というものを徹底的に批判し、評価したのである。確かに、その教団幹部に対しては厳しい批判がなされたし、宗教団体と言うものがいかにそのメンバーたちを洗脳し、また社会的にも問題を引き起こしうるかということも指摘された。しかし同時に、現代社会の日本人、特に若い世代が精神的に飢えていることも確認され、同教団も、当初は、精神的に飢え、社会からの疎外感を感じ、生きるための価値観を求めていた若者たちや高学歴・ハイキャリアのブレーンたちを引き付けていったことも確認された。全国のテレビ番組で宗教の意義や真のあり方が論じられ、また、価値観に関する比較宗教論を扱う番組も現れた。このようなメデイア的活動が全国的で行われたことは、非常に画期的な出来事である。

これまでよく、現代日本人は無宗教者であるというレッテルが貼られてきた。確かにそのような風潮が強かったことは事実であるが、同時に、戦後は何度か宗教ブームを見てきており、宗教に対する関心が高まってきていることも事実である。これは、物質的ピークを迎えた日本社会の精神的渇望を表していることは、前述の事件でマスコミが指摘した通りである。実際、図 6 に示す通り、主な新宗教団体の信徒数だけでも優に 4300 万人を超えており、これは人口の約 35%であるから、宗教や精神的なものに関心が薄いとは言えない。

日本バハイ共同体の歴史 [2]

バハイ教の伝道者たちが日本へ最初に到来したのは、今世紀の初頭である（Sims,

---

[1] 山口県立大学非常勤講師
[2] 表 1 参照

1992, p.5)。1909 年に Howard Struven 氏および Charles Reymey 氏が、1911 年に Surelia Bethlen 氏、それから 1914 年に Dreyfus-Barney 氏が日本へ旅をしている。しかし、長期滞在を目的として日本へ来たのは、George Augur 博士と Agnex Alexander(以下アレキサンダー)氏が初めてである。前者は 14 年の 6 月に到着し、翌年の 4 月まで滞在し、その後も何度か妻の Ruth さんと一緒に日本へ戻ってきており(同上、p.5)、アレキサンダー氏は、14 年の 11 月に日本へ到着、67 年まで何度か出入りがあったが、合計 31 年間、日本で過ごしている(同上、p. 9)

日本人で最初にバハイ教に入信したのは、山口県出身の山本寛一朗氏で、それも 1900 年代の初頭のことであったが、これは米国カリフォルニアでのことであった。その後藤田佐弐郎氏、望月由理子氏などが続く。

日本では、アレキサンダー氏が東京などを中心として活動した。第二次大戦まで、日本盲目協会会長の鳥居徳次郎氏、渋沢栄一子爵、中央大学の創設者増島緑一郎氏、慶応大学の学生、エスペランチストなど大学教授、文芸家、思想家、博愛家などの間で、バハイ教の考えや思想が広まっていった。

しかし第二次大戦により宗教的弾圧を受け、バハイ共同体は散らばっていった(Sims, *Japan Will Turn Ablaze!*, 1989, p.115)。アレキサンダー氏は 1937 年に聖地イスラエルを訪問しているが、その間に日本は戦争へと向かっていき、彼女は日本へ戻ることはできなかった。

戦後、日本バハイ共同体が再スタートする。現在あるバハイ共同体は、戦後、「世界十年聖戦」プロジェヘクトを通して来日したパイオニアの人たちにより再建された。戦後は、価値観が大きく変わり、民主主義や男女平等などが取り入れられた反面、宗教的要素がすべて教育や社会から取り払われた。宗教観なき環境の中で、日本全体が再建されていった。

その後、1948 年に日本国内最初の地方精神行政会が東京に発足し、1956 年にバハイ共同体は宗教法人化された。1957 年には北東アジアバハイ地域精神行政会が初めて選出され、1975 年には日本バハイ全国精神行政会が誕生した。大部分がパイオニアにより構成されていた全国行政会は徐々に日本人メンバーも増え、全国大会も日本語で行われるようになっていった。

1990 年代は、聖なる年 1992 年に 200 人の日本バハイがニューヨークで開催された第 2 回バハイ世界大会に参加したり、一般読者向け書籍の「バハオラのビジョン」が店頭で販売されたり、リヒテンシュタインのアルフレッド王子による日本での未来学講演があったりと、ハイライトに豊富な1年であった。4年計画に関して言えば、人材開発機構 BID が発足し、全国各地で人材の開発と地域共同体の発展に尽力を注いでいる。広島・長崎国際リレーは 1994 年より毎年開催され続け、99 年で6回目を迎えた。オーストラリアとの精神軸強化も促進され、文献出版なども進められている。

統計に見る現状[3,4,5]

現在の日本バハイ人口は 2、666 人である(「地区順バハイ名簿」、1999)。全国の成人バハイ総人口は 1518 人、バハイ人口が最も多いのは福岡県で 385 人、その次が北海道の 175 人、3 番目は山口県の 122 人である。いずれも、一般人口の割合とは統計的に有意

[3,4,5] 図 1、2、3 参照

な差がある。さらに、地区別で見ると、九州が 520 人、関東が 279 人、北海道が 175 人、西中国が 123 人となっているが、関東は一般人口が 36%であるのに反してバハイ人口は 18%に過ぎない。しかし、九州は 34%、北海道が 12%、西中国は8%となっており、一般人口の割合よりも多い。また、男女別で見るとバハイ人口の男女比は 42:58 で、一般人口の 49:51 とは有意な差で、女性の方が多くなっている。さらに、日本語の氏名を有する人と、外国の氏名を有する人（ただし結婚で名前が変わっている日本人は日本語名の中に入れてある）との比率は、バハイ人口では 90:10 である。最も比率の差が大きいのは中部地区の 66:34 で、差が小さいの22は北海道の 97:3、九州の 96:4、東北の 94:6、沖縄の 93:7 などである。

日本国内の宗教人口を見ると、信者数の合計が日本総人口の 2 倍近くもあり,明らかに仏教系と神道系での重複が見られる [6]。諸教に分類される単位宗教法人 [7] だけでも、16,000 程になり、その信徒数は 1,000 万人を超える (文化庁、1999)。現在、大規模を誇っている宗教団体を挙げると、天理教の 189 万人、立正佼征会の 654 万人、霊友会の 320 万人、PL教団の 123 万人、真如苑の 72 万人、幸福の科学の 1,000 万人（「新宗教事典」、1990）、そして創価学会の 1,700 万人などである（「新宗教事典：本文篇」、1994、p.195）。また、外国から伝道された宗教としては、ものみの塔冊子協会（エホバの証人）の 16 万人、末日聖徒イエスキリスト教会（モルモン教）の 17 万人などがあげられる（「新宗教事典」、1990）。さらに世界のレベルで見ると [8]、信徒数で最も多いのはキリスト教の約 14 億人、次いでヒンズー教が約 8 億人、イスラム教が 6 億人、仏教が 5 億人である(「世界宗教大事典」、1991)。新宗教ではエホバの証人が 469 万人、モルモン教が 902 万人、バハイ教は約 600 万人である [9]。日本バハイの人口は全人口に占める割合が 0.00002%であるのに対し、世界のバハイ人口の世界人口に占める割合は 0.12%で、日本のそれの 6,000 倍である。

目的

神の最新の啓示であるという重大な宣言をしているバハイ教の規模が日本においてこれほど小さいことは驚きに値する。日本バハイ共同体は、その歴史が約 100 年あるにしては発展が非常に遅いように見える。これをどのように理解すべきであろうか。また、一方では宗教が排他され、一方では宗教ブームが沸くという一見矛盾した日本の宗教的背景において、日本バハイ共同体は、どのような位置にあるであろうか？さらに、日本バハイ共同体の発展に影響する要因を確認し、それらがどのように影響してきたかを分析してみる。最後に、その分析結果を基に、21 世紀以降の日本バハイ共同体がどのような方向に向けて活動をすべきか提案をする。

方法論

[6] 図 4 参照
[7] 図 5 参照
[8] 図 7 参照
[9] 図 7 参照

この研究をするにあたり、二つの視点から取り組みたい。まずは、宗教と科学の調和という原則の科学の部分で、バハイ信教はその方法論において科学的であるという視点である（Shoghi Effendi, *World Order of Baha'u'llah*, 1938, xi）。この視点では、統計的資料、他の宗教との比較、著者による観察から得た情報をもとに分析を行っていく。

もうひとつの視点は、神秘的な視点である。守護者は神の宗教の真髄は神と人間をつなぐあの神秘的なつながりであると述べている。したがって、科学的に実証できることだけがすべての説明ではない。そこで、この視点からは、バハイ教の聖典を基に、共同体の発展に関する示唆を探っていく。

統計の背景にある真実

統計というものはあくまで数的データであり、それをどのような基準でどのような方法で収集したかにより、その意味は大きく変わってくる。たとえば、図 2 に見られるように、日本の信者数の総計は 2 億 1,000 万人を超えており、日本人口のほぼ 2 倍である。つまり、一人で 2 つまたはそれ以上の宗教に属しているからこうなるのである。仏教系と神道系だけでほぼ 2 億人になるので、おそらく寺社に何らかの形で地域的に関わっている人達はみな「信徒」になっているものと思われる。新宗教の方を見れば、その団体が出している新聞や雑誌を購読している人や世帯を信徒と見なしているならば、その数はかなりのもになり得る。また、厳密な意味での「信徒」かどうかも判断できない。

バハイ教の場合、その教えや機構の仕組みすべてをくまなく知る必要はないが、バハオラの教えに精神的に惹かれ、バハオラ、バブ、アブドル・バハの地位を理解し、従わなくてはならない教えと機構があることを知っておくことが行政的には加入の最低条件となっている(Shoghi Effendei, *Baha'i Administration*, p. 90)）。つまり、単に興味や好奇心で雑誌などを購読することでは「信徒」とはみなされないのである。

また、世界的なレベルでは、ヒンズー教、仏教、イスラム教、キリスト教など歴史が 1,000 年、2,000 年、あるいはそれ以上ある上に、地理的な分布も複雑になり、統計はどうしても推計になりがちである（[世界宗教大事典]、1991）。

より正確な分析を行う上で、統計的な信頼性と妥当性について、今後より明らかにしていく必要がある。

共同体発展を左右する要因

ここで、日本バハイ共同体の発展を左右すると思われる要因についてリストアップする。これは、次の尺度に基づいて作成した。(1)人々がバハイに惹かれる理由、(2)バハイ信教そのものの特徴、(3)一般日本社会と日本人の思想・行動の観察、(4)共同体内の活動や個人的経験――これらを基に、日本バハイ共同体とそのメンバーが与える影響について分析する。

バハイに惹かれる理由

精神的教えの美しさ・すばらしさ：バハイ啓示の中枢核は、魂を揺さぶり、良心に訴える精神的な教えである。それは、神のすべての宗教に共通な永遠の精神的教えの部分である。愛・正義・慈悲・調和・英知など、人間の最高の美徳を修得し、実践していくことに生きる目的を見出すのである。そしてバハオラやアブドル・バハの人生にその模範を見出し、お手本とするのである。

また、「真理の独立探求」の原則による自由意志の尊重も、バハイに惹かれる大きな理由である。宗教団体はとかく従順を強調するあまり、独断的になりがちで、個人の自由な探求ができず、がんじがらめになる場合が多い。

これと関連して、理性と信仰が調和する原則、つまり科学との調和の教えも心強い。お互いに補足しあって初めて、真の発展があると説いているからである。

現代のニーズに合った社会的教えの妥当性：人類の一体性、男女の平等、国際共通語・共通文字の採用、科学と宗教の調和、地球規模の行政機関の必要性、極端な経済格差の是正、地球文明の推進――これらは、現代社会に特有の課題にぴったりと合った斬新な教えである。

『矛盾』の解消：さらに、これまでは矛盾と考えられてきた多くの問題に調和的・統合的な見方を断言して、解決させている。人種間の身体的違いは美であり健全であり、人類は同じ親元からきていること（人類の調和）、神の宗教はすべて同じ基盤・起源を有していること(宗教の一体性)、科学と宗教は同じ真理の別々の面であり、補足的であること、物質生活と精神生活は相反するものではなく、調和されてはじめて人間の成長と発展があることーーなどである。

バハイの人々と共同体内のモデル：バハイの人々の模範的な生活態度に個人的に惹きつけらえること、バハイ共同体の「多様性の中の統合」、活力性（いきいきとしている）に満ちた雰囲気なども、人々を惹きつける。生活における実践と実りが、そこには感じられるからである。

バハイ信教そのものの特徴

発祥の地がペルシャであること：バハイ教が日本に到達するまでには、発祥の地ペルシャからバハオラとその家族がイスラエルのアッカに追放され、それからアブドル・バハがアメリカを訪問し、そこから日本へパイオニアがやってくるまでにおよそ半世紀かかっている。また、聖典が啓示されたのはアラビア語とペルシャ語で、それらが英語への訳を通してから日本語に訳されているので、時間がかかっている。

言語的障壁：原典がアラビア語・ペルシャ語で、ほぼ全ての日本人が英語訳または日本語訳を通さないと理解できない。

献金はバハイのみの特権：バハイ共同体は、その業務の運営にはバハイのメンバー以外からの献金を受け取れない。バハイ以外のメンバーがいかにその教えに賛同し、援助したいと感じても、その人や機構から来る献金はあくまで一般的な博愛事業にしか用いることができず、バハイ共同体独自の発展のためには用いられない。つまり、バハイ啓示の意味と目的を十分に理解した人でなければ献金に参加できないのである。そのため、数人のパイオニアから開始し、それから徐々にその輪を広げていくのだから、財政的にもその拡大は非常にゆっくりとしたペースとなる。

スケールの大きさ：バハオラのメッセージの内容は、人類にとってこれ以上重要かつ重大なものはない。生きている目的、死後の世界という宗教の真髄となるメッセージだけでなく、同時に、約 1,000 年に一度、神から啓示される新しい宗教であると宣言されているのであるから、社交クラブに入るような気楽なものではない。妥協も許されない、いい加減な態度

も許されない厳しさがある。

生きる標準の高さ:「ケタベ・アグダス」を基盤とするバハイの生き方の標準は、現代社会人にとって、非常に高いものである。それは、何かのクラブのように、いくつかの局面だけに関する規則があるのではなく、個人と社会の生活全面に関するものであるだけに、それを実行する者にとっては大いなるチャレンジとなる。

日本社会、日本人に関する要因

物質的な豊かさ:第二次世界大戦では宗教が戦争の道具となり、敗戦を経験し、天皇と国教としての神道の価値観が崩れ、日本人は精神的な拠り所を失った。60 年代以降、物質的に豊かになり、「宗教」はますます避けられるようになった。しかし物質的ピークを迎えた 1980 年代頃から精神的なものとのバランスを取り戻したいという傾向が強まってきつつある。生きる目的を説明し、いかに物質性と精神性が深く関連しているかを理解する必要がある。

組織的宗教団体への嫌悪感:物質的に豊かになったと同時に、精神性への渇望が強まったことも事実である。しかし、組織化された宗教団体への嫌悪感が強い。これは、宗教団体の名において犯されてきた数々の犯罪や事件やスキャンダルのせいである。したがって、「宗教」という表現やイメージは否定的となり、探求する以前に拒んでしまうのである。

「神」観念の違い:伝統的な「神」観念が欧米と大きく異なるため、西洋的な神観念の紹介の仕方をすると拒否される。日本人の神観念は汎神論的であり、やや多神論の感もある一方、西洋的な神観念は、人格神的一神論である。一神論という意味では、バハイの教えに近いのであるが、バハイの神観念は、神の本質は不可知であること、その不可知の神の御心を知るために、神の顕示者達が遣わされているということである。したがって、神は偏在する、不可知であるということは汎神論的であるが、同時に、人格を持った顕示者達が神の代理者であるという意味では人格神論的でもある。

伝統との相違:伝統的な教えや考えとバハイのそれとの不一致による拒否感がある。たとえば、輪廻転生、土葬、死後の世界、魂の性質などに関する教えや一般的な生活様式との不一致、たとえば飲酒禁止、断食の実践、政党政治への非参加などもあげられる。

外国嫌い:バハイ共同体には当然外国人が多い。それが逆に、外国嫌いの気配が強い日本人や地域にとっては大きな障壁となっている。しかし、この「多様性」はバハイ共同体の中心核であり、妥協できるものではない。ただ、導入の時点では英知を活かしたアプローチを考えることもできる。

周りからの圧力:日本人は、家族や友人を含め、周りの目を非常に気にする、とよく言われる。宗教となればなおさらのことで、「得体の知れない」宗教団体にかかわることほど、世間の評判に影響しうるものはない。そこが、ある宗教に惹かれてはしても、加入するまでに至らないもうひとつの大きな要因である。

バハイ共同体、機構、または個人バハイによる要因:

学習・努力・修行・経験の度合い:まずは、自分自信が学習し、鍛えること、これは周りを影響していくための鉄則である。

共同体内での人間関係の不和:共同体内の人間関係がうまく行っていることも、周りを低つけるための大きな要因となる。

翻訳に対する努力:翻訳されている聖典やバハイ文書の数が限られている。英語で既に出版されている聖典のうちで、日本語になっていないものがまだかなりあるだけでなく、ショーギ・エフェンデイや万国正義院がこれまで出してきたメッセージや著書の多く（前者の場合ほとんど）がまだ日本語で出版されていない。バハイ外部の世界と同じように、日本語だけの世界と英語の世界では、入手できる情報の質と量の差がかなり大きく、コミュニケーションに致命的な障壁ができている。また、翻訳されていても読みにくく、日本語としてすんなりと受け入れられていない。

活動のしすぎによる燃え尽き症候群:少ない人数なので負担が大きく、燃え尽きてしまい、さらに少ない人数に減ってしまう。

生計とのバランス:バハイは自分の仕事もこなしながら、バハイの仕事も従事しているので、活動になかなか十分な時間を費やすことができない。

具体的解決策

バハイ教の特徴

世界宗教として中近東が発祥の地となったことはよくあることであり、何ら不思議はない。西洋で大きな力を現したキリスト教でさえもその発祥地は中近東であった。出発点が日本から遠く離れているからと言って、日本だけが不利というわけではない。

原典がペルシャ語・アラビア語であることは西洋のバハイにとっても、最初は大きな障壁となった。しかし、その優れた英語訳がショーギ・エフェンデイをはじめ、世界センターで多数発行されている。また、英語で出版されている文献の量は、現在では膨大なものであり、英語で研究・学習をする限り、資料は完全とは言えなくとも、かなり豊富であると言える。要は日本バハイが、英語を使って研究や学習をするか、または文献をまず日本語に訳してそれから日本語による独自の文献を拡大していくかのどちらかであるが、現実的には日本語による文献をもっとそろえるべきであろう。日本で数百万あるいは一千万以上の信徒数を誇る教団の多くに見られる共通の特徴は、教祖が日本人であり、日本語による教義の説明や応用が非常に豊富なことである。バハイ教にも、豊富な書簡が存在し、さらに英語による数え切れないほどの文献がすでに一般バハイによっても著されている。バハイ世界としては、豊富な文献がすでに存在するのである。今後の日本バハイ共同体の発展の鍵のひとつは、この文献の量と質と言えよう。日本人バハイが日本語で読み、暗記し、唱え、教えを他人に説明し、エッセイや本を著し、できれば作詞作曲・劇・映画などの作成にまで応用できるようになれば理想的である。表 2 は、現在英語でそろえられているバハイ聖典と主な文献のリストである。網掛け部分がすでに日本語として発行されているものであるが、まだまだ英語文献との差が大きいことは一目瞭然である。今後、これらの文献を一刻も早く整備していくことが求められる。

仏教や儒教や神道など、日本の思想に関係の深い宗教や哲学に関する言及がバハイの書で少ないのは確かに残念なことである。しかし、ショーギ・エフェンデイはこれについて二つの理由を挙げている。ひとつは、「バハオラの時代に、これらの宗教を背景とした信徒がいなかったこと」(*Lights of Guidance*, #1695)。もうひとつは、アジア、特にインドの宗教は歴史が古く、その起源や関係を説明することが難しく、バハイの教えをあてはめて説明をするのは将来のバハイの学者たちの仕事である、ということである（cf. 同上、#1696）。実際、ヒンズー教などはその起源が不明で、現在のヒンズー教は数千年の間に様々な宗教的要素が融合されてできたものである。クリシュナが創始した宗教と簡単に片付けられるものではない。仏教もまた、日本ではその経文が八千あると言われており、そのすべてを読み尽くし、研究することは、仏教学者でも難しいとされる。旧約聖書、新約聖書、そしてコーランのように比較的簡潔に一冊の編纂書のような形で教えが凝縮されてい

れば、言及するのももっと容易になると言えよう。しかしそれでも、これらの宗教の中で経典の信憑性が最も高いのはコーランで、聖書の内容はモーセやキリストが実際に書いたものではなく、彼らが実際に発した言葉と言われるものはかなり限られている。日本バハイにとっては試練となるが、ショーギ・エフェンデイの言葉を借りれば、仏教・儒教・神道とバハイの教えを関連付けて説明するのは、日本のバハイ学者の役割なのである。このように一見ハンデイとも取れるが、仏教・儒教・神道を背景とする日本人は、宗教的な迫害という歴史が、他の地域に比べると少ない。宗教的にはある意味では寛容なのである。この土壌を活かして、宗教的調和を推進するのは、われわれの使命なのかもしれない。

バハイ基金への献金がバハイメンバーに限られていることは、財政源をかなり制限することになるようだが、バハイ行政機構の健全性を保つためには、必要な原則である。バハイの教えの目的と方法を正しく理解している者だけが献金できるということは、バハイのメンバーも教えを良く理解しなければならないという意味である。理解が深まり、犠牲の精神が高まれば、献金の額は増えていく。たとえそれが最初は一人、二人、数人という規模でも、やがてはそれが倍増し、指数的に増えていくのである。さらに贈賄などの複雑な問題に絡まれることもなくなる。

日本社会・日本人

物質的ピークを迎え、精神的なものとのバランスを取り返す絶好のチャンスであることを示すことができる。また、「宗教」の名において多くのスキャンダルが起きている今だからこそ、真の宗教のあるべき姿を実証する機会でもある。バハイの原則、方法論、態度というものを正確に伝え、また模範で示す機会でもある。前述の通り1995年に某団体の一連の犯罪が発覚したとき、日本中がその事件の背景を分析し、事件そのものへの大変な批判度同時に、精神性の重要性、宗教の役割などが堂々と議論されていたし、認識されていた。悲劇が起きても、それを建設的な方向へ持っていくことはできるのである。

「神」、「宗教」、「預言者」、「魂」、「死後の世界」などに関しては、バハイの定義をし、わかりやすく説明することにより、多くの誤解が解けるはずである。また、魂・死後の世界の存在については、科学的なデータも集まりつつあるが、科学で証明できないことがすべて偽りであるとは断言できない事も指摘すべきである。輪廻など、日本の思想、価値観、生活様式との違いについては今後積極的な研究と文献開発が必要とされる。バハイは「多様性の中の統合」を唱え、地域や国の文化を尊重するが、究極的には新しい文明をもたらすのが目的なので、生活様式が変化しうることも当然である。しかし、その変化の度合いは暫定的である。たとえば、ホゴゴラの法が施行されたのは 1992 年であり、遺産相続に関する法律はまだ施行されていない。

バハイの目標のひとつは人類間の調和であり、地球共同体の建設であることを説明し、外国人との接触も学習のひとつなのだと説明する。世界的宗教のほとんどが中近東かインドで発祥している。発祥するときは外国でも、その対象は全世界である。

バハイ共同体・機構・個人

バハオラは、他人に伝道したい者はまず自分自身を教育すべきことをはっきりと述べている(「落穂集」、CXXVIII)。まず自身がしっかりとした神の信徒でなければ、伝道はできない――これは大原則である。アブドル・バハも、他人に伝えたいと思う美徳をまず自分が持ち合わせなくては、他人にそれは伝わらないことを明言している（*Individual and Teaching*, p.7）。学習と自己修練はすべてのバハイの義務である。アブドル・バハは、こう述べている：

> 伝道者は伝道するとき、その発言が炎のようにに影響を与え、自己と熱情のベールを焼き尽くすように、彼自身すっかり燃え立たねばならない．伝道者は又、他の人々が強化されるよう全く謙遜でなければならず、そして、天井の群衆の旋律と供に教えられるよう自己を消し去り、はかなき状態にあらねばならない．そうでなければ、彼の伝道は何の効果も与えることはないであろう．（アブドル・バハ：*Individual and Teaching*、p．9）

アブドル・バハは、試練には二種類あると述べている。ひとつは神からの贈り物、成長のための機会であり、もうひとつは我々自身の愚かさや無知による結果である。われわれは、後者による試練をお互いのために作り出してしまわないようにすべきである。また、最大の試練は共同体内部から来るとも述べている。最も調和と和合があるはずと思える共同体内部から、最大の試練が来るのである。それはメンバー同士の不和かもしれないし、聖約の破壊者による活動かもしれない。それはあたかも、夫婦や家族のように、社会で最も絆の強いと思われている単位で、最も頻繁に試練が起きるのと同じようなことである。

バハイのメンバーになったからといって、それですべてが万事うまく丸く納まるというわけではない。入門しても、やるべきことをこなさなくてはならないし、日々の成長においては誰しも同じことである。また、成功すればするほど、それに伴う誘惑や試練も増大する。また、人間的な弱みもあるし、感情もある。われわれは、狂信・頑迷・迷信、嫉妬、うぬぼれや傲慢、極端や無鉄砲などの誘惑から身を守り、美徳を優先させるよう努力しなくてはならない。

バハオラは、「犠牲は神秘である」と言い、アブドル・バハも、「犠牲には限りがない」と断言している。しかし同時に、「それでも中庸を守れてこそ、人間と言う称号に相応しい」と述べている（*Mystery of Sacrifice*）。確かに、精神的原則が関わるところでは妥協が許されない反面、応用面では柔軟性があることも要求される。また、如才なさと智恵のあること、多面的でありかつ集中的であることもバハイの必要条件である。さらに、奉仕が口実で仕事や家庭をおろそかにすることはできないとも述べている。

一方では外国人は日本語を学び、文化を理解する必要があるが、日本人も外国のことにもっと理解を示す努力をすべきである。そして究極的にはわれわれは「バハイ」という新人類の文化を築こうとしているのだから、あまり日本と外国という区別にこだわらないべきである。あくまで「多様性における求心性」に基づいた中庸の態度が大切である。

「聖約」の学習はバハイとしての旅路の最初のほうで導入するべき、重要な主題である。

将来的には、行政的活動での生計はありえるが、あくまでこれは発展のレベルや状況に応じた相対的なものであり、規則にはできない。

結論

日本で 100 万人以上の信徒を有している宗教は、神道系と仏教系とキリスト教系及び諸教に属する単立の新宗教のみである。そのほとんどが日本語で豊富な聖典や文献を有している。キリスト教系の場合、現代では英語を通して豊富な文献や情報が入手できる。バハイ教は、アラビア語とペルシャ語が原典の言葉であるが、それでもその大部分が英語に訳されており、また英語で豊富な文献が整っているので、日本バハイ共同体も同程度の文献を日本語で用意することは不可能なことではないはずである。まず、教えが信徒の間に浸透し、強化され、そして外部へと伝わっていくためには、教えそのものが純粋な形でアクセスできることが大先決である。バハオラ、バブ、アブドル・バハの書簡で英語になっているものはすべて、読みやすい日本語に訳されるべきである。これが聖典であるからこそ、すべての日本人が自分の目で見て読んで確かめることができるようにすることは、共同体発展と伝道の必須条件である。さらには、より新しい時代のバハイのためにショーギ・エフェンデイや万国正義院が書いたメッセージがあるのだから、これらもすべて日本語でアクセスできるようにすべきである。

次に日本語による様々な主題に関する書籍を出し、日本の思想や社会問題に応用させていくことにより、教えの効果がより明確にされることとなる。

また、バハイ共同体やメンバーは、学習を続け、美徳を磨き上げ、試練に耐えうる力を養わなくてはならない。特に重要なのは、アブドル・バハの述べているように、われわれは、相手を無知なものと見なしたり、けなしたりしてはならず、他人に敬意を払うべきである。そして「ここにこれらの考えがある、どこから、どのような形で真理が見つけられるか、共に探求しようではないか」という態度で行動すべきである（*Individual and Teaching*、p.11）。また、いかに優れたメッセージを持っていても、それを全部伝えられるとは限らない：「自分が知っていることのすべてが必ずしも明かすことができるとは限らず、明かすことのできる全てのことが時を得ているとは限らない。また時を得た発言が全て聞く者の理解力に適しているとは限らない」（アブドル・バハ、同上）。したがって、実際に聞く者が理解できる量というものは、かなり限られているかもしれないのである。大木は、その最初の成長段階においては，非常に小さく、速度も遅い。しかし、数百年するとそれは大樹に成長し、場合によっては千年以上も実をならし続ける。そしてちょっとやそっとの雨風にはびくともしないのである。われわれの仕事はこの大樹の成長と同じなのかもしれない。

さらに、アブドル・バハは、こう述べている：

> 人間や天使の理解力が及びもつかない力、はるかにはるかに及びもつかない力が、この大業には存在する。その目に見えぬ力がこれら全ての外的活動の源泉である。それは心を動かし、山を引き裂く。それは大業の複雑な業務を統治し、友人たちを奮い立たせる。それは全ての反撃の力を木端微塵に打ち砕く。それは新しい精神世界を創り出す。これが、アブハ王国の神秘である。（*Power of the Covenant*、*Part I*、1）

また、「犠牲」には限りがなく、かつ神秘である。われわれの今なしている努力の報いと意義は、生きている間には完全にはわからない。子供の教育の結果でさえ、親は生きている間に完全にその報いを受けるとは限らない。ならば、神の宗教の発展にためにわれわれが払う犠牲や努力の結果は、生きている間に完全に見ることができなくとも、不思議はないのである。このように、究極的には、われわれ人間には、神の大業の成長の神秘性については、完全に理解できないものと思われる。

またアブドル・バハは、真の宗教の目的をこう述べている。

> 宗教は全ての心を結び、戦争や論争を地球上から消滅させ、精神性を向上させ、各々の心に生と光をもたらすべきである。もし宗教が、嫌悪や憎悪や分裂のもととなったら、それはない方がましで、又、その様な宗教から脱退することは真に宗教的な行為である。なぜなら、治療の目的は治療をすることだというのは明らかである。しかし、もし治療が病を悪化させるだけであったら、そのままにしておいた方がましである。愛と和合のもとにならない宗教は宗教ではない。全ての聖なる預言者らは、魂のための医者のようなものであった。彼らは、人類の治癒のために処方を与えた。したがって、病を引き起こすような治療法は、偉大で最高なる『医者』（神の顕示者）から来るものではないのである。（*Paris Talks*, p.130）

以上、科学的視点と神秘的視点とを統合させて、21 世紀の日本バハイ共同体には、次のことを提言したい。

精神性の復活：しかし科学、理性と調和したもの、進歩的なものを推進する。各人が日々の祈り、読書・学習、仕事、奉仕を実践するように奨励する。
国際性の開発：愛国心と世界市民権の意識とが調和した考えと行動を促進する。
機構・共同体の開発を進める。
言語計画：日本語での文献をそろえていく一方、英語（または国際共通語として採用される言語）でのコミュニケーションを共同体内で可能にしていく。
技能的訓練：インターネット、電子メール、ワープロなどなどコンピュータ技能を修得すること。
「宗教」を生きる：「宗教」を教えようとするのではなく、「宗教」を生きること。

人間の魂の啓発と地球文明の建設はすべての宗教に共通の目的と使命である。バハイ教の教えを純粋に他の宗教や人々とも分かち合いながら、共に真理を見つけていく謙虚な態度で、この聖なる大事業を力強く推し進めていこうではないか。

引用文献

アブドル・バハ (Abdu'l-Baha) (1976). 「パリのアブドル・バハ講和集」. 英語版から邦訳. 日本バハイ全国精神行政会監修. 東京、バハイ出版局 (1959).

——(1990).「質疑応答集」. 英語版から邦訳. 日本バハイ全国精神行政会監修. 東京、バハイ出版局.

——(1978).*Paris Talks*. Wilmette: Baha'i Publishing Trust.

——(1981). *Some Answered questions*. Comp. & trans. Laura-Clifford Barney. 4th US edn. Wilmette: Baha'i Publishing Trust.

Afshin, Counselor(1990). 東京バハイセンターでの顧問補佐会議での話。

バハオラ (Baha' u' llah) (1983). *Gleanings from the Writings of Baha'u'llah*. Trans. Shoghi Effendi. 1st pocket-size edn. Wilmette: Baha'i Publishing Trust.

「地区順バハイ名簿」(1999)。全国バハイ事務局。

Individuals and Teaching. (1977). Comp. The Research Department of the Universal House of Justice. Wilmette: Baha'i Publishing Trust.

Japan Will Turn Ablaze！: Tablets of Abdu'l-' i-Baha, Letters of Shoghi Effendi

and
Historical Notes about Japan (1992) Comp. Barbara Sims. Tokyo: Baha' i
Publishing Trust, 1974.
Lights of Guidance, The. (1989). Comp. Helen Hornby. Revised and enlarged edn.
New Delhi: Baha'i Publishing Trust.
Mystery of Sacrifice. Ali Nakhjavani **講演テープ。バハイ世界センター。**
Power of the Covenant: Part 1. The National Spiritual Assembly of the Baha'is of
Canada. Thornhill: Baha'i Canada、1982.
「世界宗教大事典」(1991)。**山折哲雄監修。東京、平凡社。**
「新宗教事典」(1990)。**井上順孝、孝本貢、対馬路人、中牧弘充、西山茂編。東京、弘文堂。**
「新宗教事典：本文篇」(1994)。**井上 巡幸、孝本貢、対馬路人、中牧弘充、西山茂編。東京、弘**
文堂。
Shoghi Effendi (1938). World Order of Baha'u'llah. Wilmette: Baha'i Publishing
Trust, 1982.
「宗教年鑑 平成 10 **年版」**(1999)。**文化庁編。東京、文化庁。**
Shighi Effendi. *Baha'i Administration*. Wilmette: Baha'i Publishing Trust, 1974.
Sims, Barba (1989). *Traces That Remain*. Tokyo, Baha'i Publishing Trust.